

『素人性』によって生成される実践**—初学者の「ふりまわされる」体験から見えてくるもの—**

○ 聖隷クリストファー大学 福田 俊子 (569)

キーワード：社会福祉実践・素人性・初学者

1. 研究目的

筆者は、現職のソーシャルワーカーを対象とし、P. Benner(1984)の「看護師の技能習得の5段階モデル」の適用に関する研究を進めてきた(吉川ら 2007:2008、福田ら 2009:2011a:2011b)。専門職業的自己を生成するプロセスの初期に位置づけられる「初心者・新人」の段階は、「専門職業的自己の形成」がはじまる時期であり、新人ワーカーは「職場内外のワーカー集団の中で、常に他者と自己を比較し、「成長しなければならない自己」と直面し続けている(福田ら 2009)。この特徴は初学者の学生にも当てはまる。

「初めての実習」は、学生にとってインパクトの強い体験となることが多く、不全感や挫折感などといった否定的な感情が伴うことも少なくない。教員や学生は、このような体験を技能習得が不十分であるが故の「失敗」として片づけてしまいがちであるが、時にその体験をよく聴いてみると、必ずしも「失敗」とは言えない、むしろ初学者だからこそ可能であった実践が浮き彫りになることがある。

初学者にかかわる先行研究としては、実習や演習における専門職教育のあり方等に焦点を当てたもの(荒木ら 2010、深谷 1993 など)が多いが、初学者を専門職業的自己の変容・成長のプロセスの一段階として位置づけ、その「素人性」について考察されている研究はまったくない。そこで、本研究では、一人の社会福祉専門職教育における初学者の実習体験を取り上げ、「素人性」に着目しながら解釈し、記述することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本学社会福祉学科介護福祉専攻に所属する学生Aさんが、1年次の9月中旬に、X市の介護老人保健施設にて実習した12日間の実習ノート、レポート、及びインタビュー調査(60分程度の半構造化面接調査を3回実施)で得られたテキストデータを、現象学の知見を手がかりとしながら分析を進めた。具体的には、Aさんの語り口に特徴的な言葉の使い方や言い回しに注目しながら、浮かび上がってきたデータのまとまりを全体の文脈の中で捉えなおし、データのまとまり同士を結びつける概念を検討し、最後にデータをAさんの体験した時系列に整理して記述した。

3. 倫理的配慮

初回の調査では、本学の倫理綱領に基づき配慮し、2回目の調査実施前には、法政大学院人間社会研究科倫理審査会にて承認を得た。公表にあたり本人の許可を得た。

4. 研究結果

<レポートからの抜粋>

実習が始まり、2週目に入った頃、ショートステイで入所してきた認知症である女性が出た。初めての場所であり、とても不安な様子で施設内を歩きまわり、家に帰る事を訴えていたため、私はどうしたらよいかわからなかった。一緒に歩いたり、会話をしたりしたが、最後はとても怒り、気分を悪くさせてしまった。私は、自分のとった行動や発言に対し、とても悩んだ。しかし、次の日にまたその利用者さんと会ったところ「なんだっか忘れちゃったけど、あなたには感謝しているよ」と言って下さった。私はこの体験を通して、うまく会話ができなくても、ただ会話をするのでなく相手の気持ちを考え、自分なりにできることを精一杯することが、利用者さんと接する中でとても大切なことだと改めて感じた。

上記の「ふりまわされる体験」をAさんが語り直したデータにおいて、利用者は「施設ににいるという現在」を否定し、「過去とつながる『家に帰る』という未来」を志向し、それを所謂「帰宅願望」として訴えている。一方、実習生や職員は、本人の希望にそうことはできないため、このまま何とか「施設にいてもらうこと」という「現在」を志向した「対処行動」をとっていた。両者の志向はまったく逆の方向であるがゆえ、そのかかわりは自然と行き詰まり、利用者が「キレ」て、Aさんが「謝罪」するという行為をもって、双方のかかわりには終止符が一旦打たれる。そして、「2日間のかかわりの空白」の後、二人が初めて出会ったステーション前の場所で、両者のかかわりは復活するのであった。

5. 考察

本研究では、「素人性」を「これまでの人生で培ってきた生活感覚を駆使して利用者とかかわること」と定義し、「素人性」が生成する実践の特徴や、その有効性及び限界を考察した。前者については、Aさんの素朴な感覚から生まれた「謝罪」という行為が、利用者の行動の統制を回避すると同時に、利用者には「キレる」と言う自由な感情表出を促し、その行き詰まった「流れない時間」に今一度流れを呼び戻していると捉えられ、「素人性」には両者の関係に「かかわりの余白」を生成する可能性があることが示唆された。さらに、先に述べた「かかわりの空白」は、関係の消滅・断絶ではなく、新たな関係を生み出す準備期間となり、そこには気遣い・気遣われるという関係が存在していると考えられた。

後者の「素人性」が有する可能性の1つは、徹底的に「一緒にいる」という行為を生成する点である。専門職ではないAさんは初学者であるがゆえに、無力である自分を認めることが比較的容易であったため、利用者とのやりとりに対して正解を性急に求めようとはせず、「わからないままの無力な状態」で「一緒にいる」ことができたのではないだろうか。さらに、実習生の「ふりまわされる」体験は、利用者から見れば「ふりまわす」体験となり、利用者は「ふりまわす」という行為を通じて、Aさんに対し影響力を行使することになっている。以上のことから、「素人性」の2つ目の可能性は、「利用者が自分の存在を再認識するかかわりを生成する」点であると言えよう。